



1_華やかな着物やスーツに身を包み記念の1日を楽しむ
 2_久しぶりの再会にシャッター音が鳴り止まない
 3_式典終了後に思い出のスライドショーを鑑賞
 4_たくさんの人たちの祝辞に耳を傾ける
 5_中学生が受付や案内を担当
 6_この日を迎えられることを喜び合う
 7_高田副委員長の謝辞。代表して飛躍を誓った
 8_恩師と思い出話に花が咲く
 9_中学時代の部活の仲間と。練習に明け暮れた日々を思い出す

ハタチ。ここが出发点

～ハタチの今とこれから～

♡式典当日のスナップ写真や集合写真の購入は生涯学習課 (☎964-1500) まで。

実行委員会企画 「思い出撮っといで～！」



実行委員会企画「思い出撮っといで～！」は会場1階ロビーにバルーンや和傘を使ったフォトブースを設置し、インスタントカメラで互いを撮り合い、「イマ」しかないこの瞬間を写真に残そうという企画。撮影した写真は東温市公式 Instagram に掲載しています。

はどうあれ、自分たちの持っている力を振り絞ったかどうか自問自答し、胸を張って力を出し切ったと振り返れるような試合をしなければいけない。それさえできれば結果は必ずついてくる」と述べています。皆さんの夢や目標を実現するため、積極果敢にチャレンジし、新しい時代の担い手として活躍されることを期待しています」と二十歳の皆さんを激励した。

め、家族、恩師、地域に20年間の感謝を伝えた。さらに「社会に出て働く者、勉学に打ち込んでいる者、将来の道を決めかねている者、置かれている立場はそれぞれ違いますが、これまでに培ってきた力を武器に、変わりゆく新しい時代を一步一歩突き進んでいくことを誓います」と同郷の仲間たちと飛躍を誓った。

友人、家族、恩師と東温市で過ごした日々を胸に、明日に向かってそれぞれの道を歩む二十歳の皆さんをこれからも応援したい。

1月8日、中央公民館にスーツ姿や華やかな着物姿に身を包んだ二十歳の皆さんが続々と到着した。旧友との再会を懐かしみ、マスク越しでも笑顔が伝わる。令和5年二十歳を祝う会対象者は2002年4月2日～2003年4月1日生まれの383人。このうち266人(男137人、女129人、出席率69.45%)が式典に参加。同級生と大人になった喜びを分かち合った。

副市長のこぼで開会した。式辞では加藤市長が「昨年度から「成人式」を今年度から「二十歳を祝う会」と名称を改めて開催いたしました。これまでの20年間の歩みを思い返すと、家族や友人、恩師、地域の方々など多くの方の支えがあったと思います。感謝の気持ちを忘れて忘れず、これから自分が地域社会の担い手として家族をつくり、守り育てていく立場になることをしっかりと受け止め、人生を爽り豊かなものにしてほしい」と話した。さらに「サッカー日本代表森保監督が『結果

令和5年東温市二十歳を祝う会 実行委員会の顔ぶれ



東温市二十歳を祝う会は実行委員会が企画・運営する。今年のメンバーは8人。(後列左から水田さくら、平野未侑、藤原優生、中井歌楓、高田惇成、露口敦将、北條康弘、相原琢吾 ※敬称略)

今年も協力して企画・運営する実行委員の皆さんの活躍が輝いていた。

VOICE ハタチの言葉

「将来の夢は何ですか?」「感謝を伝えたい人は誰ですか?」「今の気持ちを素直に一言!」。新成人が綴った心境をご紹介します。



武士道
二十歳を祝う会
実行委員長 露口 敦将さん

皆様の心に武士道は宿っているでしょうか。我々日本人は古来より武士の血が通っております。鬨を結んでおらずとも、刀を差しておらずとも我々は武士であります。本日は武士道の中でも重きを置かれる忍耐についてお話させていただきます。忍耐とは耐え難い苦難を耐えて、耐えて、耐え忍ぶことでもあります。現代ではこの忍耐が多様性の言葉のもと、重要視されておられません。この現代の多様性の風潮の中、私は忍耐を貫いた武士を目の当たりにしました。これは私の大学で行われる8km遠泳の出来事です。彼は入学当初25mさえ泳ぐことができませんでした。遠泳当日にも積

み重なる疲労と脱水症状で誰の目から見ても彼が8km泳ぎ切れることは不可能でありました。私は彼の現状を鑑みてリタイアを提言いたしました。しかし彼は「死んでも泳ぎ切る」と言ったのです。結果、彼は完泳することができました。皆様は彼を無謀な馬鹿と思うでしょうか。それは全くの見当違いであります。彼は何を思っ苦難を耐え忍んだのか、それは「名誉」、ただそれだけではありません。彼は武士でありました。彼は武士道とは苦難を耐え忍んだ先にある名誉であると強く知らしめたのです。皆様も二十歳の節目に我に宿る武士道を意識してみてくださいいかがでしょうか。

ハタチの声

二十歳を祝う会で伝えた、20年間の歩みを胸に今の時代を生きる二人の声が会場に響いた。



宝物を守り抜く
二十歳を祝う会
実行委員 やすひろ 北條 康弘さん

人生という旅を東温より始められたことは、永劫決して揺るがざる誇りである。以来、旅の道程で様々なお供に出会ってきたが、特筆すべきは演劇だ。昨年執筆した最新の戯曲では、コロナ・戦争・悲惨な事件といった不条理にまみれた現代への若者の叫びとして、徹底的に悲劇を描いた。そこでは、人の優しさが闇の中故に美しく光り輝いていた。私はこの作品を通して確信した。酷い現実が我々の大切なものを根こそぎ奪い取る。うとしても、奪えないものがある。それが優しさだ、と。思えば、このテーマは私の全作品に共通している。私は旅の中で、嵐に見舞われながらも優しさだけ

は離すまいと、必死に守ってきたのだった。混迷を極めるこの時代。憎たらしい現実が私たちに襲い、明るい未来への希求さえ拒まれることもある。そんな時、まずは、絶対に失いたくないそれぞれの愛おしい宝物を必死に守る。さすればその我武者羅な日々そのものが、必ずや誇らしい人生となる。だから、私たちは大丈夫だ。私は将来教師として、たとえ深い闇が押し寄せようとも、優しさという自分にとつての宝物を守り抜き、子供たちの未来を作っていく。旅路のどこかで、同じ場所を発った仲間たちに出会えることを願っている。

